

企画 北九州市／北九州市教育委員会／北九州市人権問題啓発推進協議会
 制作 株式会社学研教育みらい株式会社学研教育出版
 監督 こくまあつこ
 声の出演 古城望／劉セイラ／相田さやか／矢田耕司
 DVD/ビデオ(字幕・副音声入りもあります) 平成24年3月制作 上映時間31分



虹のきずな

制作のねらい

情報不足や誤った情報、あるいはそれに基づく不正確な知識や思い込みは、同和問題やHIV感染者・ハンセン病患者等に対する差別に限らず、東日本大震災後の放射能汚染を巡るいじめや宿泊拒否など、さまざまな人権問題を引き起こす原因の一つと言えます。その点を踏まえて、この映画では、差別に対する「傍観者」あるいは「無関心」という立場に焦点を当てました。そして、さまざまな問題を自分の問題として引き寄せて考えること、人と人がしっかりとコミュニケーションを取ることで、お互いを一人の人として認め合うこと、自立した考えや行動を取ることで…の大切さを訴える作品を目指しました。

学習のポイント

- 人の「痛み」を感じるチカラ、ありますか？ → 人の痛みに気づく
- なぜ、相手のことを見ようとならないの？ → 違いを認めよう
- 人の気持ちを想像して、お互いの思いを伝え合おう → 想像力を発揮する
- 悲しみを喜びに変えるチカラは、一人一人の心の中にある → 心で受け止める
- それって、助けてあげないのと同じじゃないの？ → 傍観者からの脱皮
- 友達の友達は友達？ それとも他人？ → 信じる心の強さ
- 気づき、そして、踏み出す勇気の一步 → 勇気ある一步を

特別編集版
 「ユーナの樹とトモダチ」編
 (16分)収録

他に人権啓発映画予告編
 人権の約束事運動CM収録

■ 人の「痛み」を感じるチカラ、ありますか？

読み聞かせボランティアをしている大学生のひかりと恵。小学校の図書室『にじのくに図書館』で本の片付けをしていたひかりは、窓辺にたたずむタオロンに気づきます。ひかりのそばに寄ってきた恵は「あの子、いつも一人で寂しそうね」と話します。

タオロンが読んでいた絵本『ユーナの樹とトモダチ』の中でも、一つの気づきがありました。動物の子どもたちとリンクが初めて出会った時のことです。リスくんとウリ坊がリンクに石を投げつけます。そのとき、ウサねーちゃんとモンチャは、何かを訴えようとしているリンクの目に気づいたのです。

人の痛みに気づくというのは、人の痛みを感じるチカラを持っているということです。そして、人の『痛み』『苦しみ』『悩み』を感じるチカラは、きっと誰もが持っているチカラでもあります。『人の立場に立つこと』『もし、自分だったらとしてみること』なのですから。

でも、こうした気づきは、自分の権利や主張ばかりを叫んでいるときには、決してできません。いつもは

できていても、自分や家族の身に不安や恐れを感じているときも、難しいかもしれません。

自分がいじめられるのではという不安や恐れもそうです。エイズウイルス（HIV）やハンセン病等の感染症に対する不安、放射能に対する不安…などによって引き起こされる人権問題も、そうした例の一つと言えるかもしれません。情報不足や誤った情報、あるいはそれに基づく不正確な知識や思い込みにより、こうした不安や恐れに過敏になったとき、偏見や差別意識が生まれ、さまざまな人権問題が起こります。

それは、人の『痛み』を感じるチカラが隠れてしまうから。本当はみんな持っているチカラなのに。『人の痛みを感じる』ことを意識してみましよう。そして、意識しなくても、日ごろからいつでも感じられるようになってください。女性、子ども、高齢者、障害のある人などなど、さまざまな人権課題があることを知ることも大切です。誤った情報に惑わされて、『人の痛みを感じるチカラ』をなくさないように。

映画のシーン

恵 「あの子、いつも一人で寂し

そうね」

ひかり 「ええ…」

女子の会話

「見て見て、あの子泣いてる

んじゃない？」

「またいじめられたのかな。

先生に言う？」

「面倒だよ。無視、無視」

「だよね、私たちに関係ないし、興味もないしね。」

リスくんとウリ坊がリンクに石を投げたシーン。リンクは石を避けながら、何かを訴えるように、子どもたちを見つめる。ウサとモンチャはその目に気づく。
モンチャ「あつ」



■ なぜ、相手のことを見ようとししないの？

絵本『ユーナの樹とトモダチ』の中で、突然、島に現れたリンクのことで、ユーナの樹の下に動物たちが集まります。そこでは、こんな会話が交わされました。

「鳥たちの国で病気がはやっておるそうじゃが…」

「その鳥が病気を運んできたとしたら大変だ！」

「子どもたちにうつたらどうしましょう！」

「厄介なよそ者はすぐに島から追い返してしまえ！」

ユーナじいさまが、その国に住む鳥だけが飛べなくなる病気だから、うつることはないと説明した後も、リンクの話を知ろうともせず、追い出そうとします。

どうして、みんな、リンクの話を知ろうとしないんでしょう？

モンチャの質問に答えて、ユーナじいさまがこう答えます。

「不安だから、相手のことをよく見ようとしなくなっているんじゃない」

私たちの身近でも、地域であれ、学校・職場であれ、引っ越しや転校・転勤はよくあること。こうした

親しい仲間以外の人々を『よそ者』として排除することは、新しい仲間を寄せ付けないことであるとともに、もし自分自身がほかの地域や学校・職場に行ったとき孤立するということでもあります。

こうした『よそ者を排除する』『異質なものを排除する』『違いを認めない』意識は、不安からだけでなく、面倒だからといった理由でさまざまな差別の中でも起こっています。

同和問題もアイヌの人々への差別も、外国人に対する差別もそうです。刑を終えて出所した人やホームレスの人に対する差別もそうです。性同一性障害者や性的指向などの性的少数者に対する差別もそうなのです。

「これ、タオロンの傘だぜ」

「隠しちゃおうか」

ちょっとしたいたずらのつもりでも、そうした排除の積み重ねがタオロンの心を深く傷つけました。多数による少数の排除、少数を軽んじる意識。ぜひ、あなたもあなたの日常を振り返ってみてください。

映画のシーン

ユーナじいさま「鳥たちの国で病気がはやっておるそうじゃが…」

リス父「その鳥が病気を運んできたとしたら大変だ！」

ウサギ母「子どもたちにうつたらどうしましょう！」

イノシシ父「厄介なよそ者はすぐに島から追い返してしまえ！」

えー！

ユーナじいさまが、その国に住む鳥だけが飛べなくなる病気だから、うつることはないと言明した後も…。

リス父「この先、何が起るかわからないぞ。あんたが、責任を取ってくれるのか？」「何が起きる前にその鳥を追い出して、二度とよそ者が近づかないようにするべきだ！」

モンチャ「どうしてみんなあの鳥の話を知ろうとしないの？」

ユーナじいさま「不安だから、相手のことをよく見ようとしなくなっているんじゃない」

モンチャ「悲しい…。どうしたらいいの？」

ユーナじいさま「一人一人が相手の気持ちをよく考えてあげればいいのかもしれんな」

男子児童F「これ、タオロンの傘だぜ」

男子児童G「隠しちゃおうか」

■ 人の気持ちを想像して、お互いの思いを伝え合おう

人の痛みに気づくというのは、人の痛みを感じるチカラを持っているということ。人の痛みを感じるとき、私たちはその人の立場に立ってみたり、もし、自分だったらと思ってみたりして、その痛みを想像しているのです。

絵本『ユーナの樹とトモダチ』の中で、リスくんとウリ坊がリンクに石を投げつけたとき、ウサねーちゃんとモンチャは、何かを訴えようとしているリンクの目に気づきました。そして、想像したのです。

だから、モンチャはこう言いました。

「あの鳥、私たちと話したがっていたわ」

言葉が通じなかったじゃないかというリスくんに、モンチャはこう続けます。

「ちゃんと話を聞いてあげれば…」

きっと気持ちは通じ合える。そう思えたのです。

だから、モンチャは傷ついたリンクに会いに行きます。木の実を持って行って、警戒するリンクを和ませます。そして、名前を知り、話ができるようになります。

人の気持ちを想像し、自分の気持ちを伝える。それはお互いの理解を深めるための大切な第一歩です。

なかなか読み聞かせがうまくできないひかりは、恵にこう質問します。

「恵さんは、どうしてあんなに上手に読めるんですか？」

恵は「本を読んで感じた気持ちを人に伝えられたらいいかなあって」と答えた後、こう続けます。

「人の気持ちを想像したり、お互いの思いを伝え合ったりすることって、大事なことでしょ？ 難しいけどね」と。

人の話をよく聴いて、その人の痛みや苦しみに共感する。そこまできたなら、もう一歩進んで、自分の気持ちを伝え、相手の気持ちを聴きたいですよね。そうやってお互いの思いを伝え合うことで、人の世界はどんどん広がっていきます。

伝え合うことで理解が深まり、理解が深まることで、あなたの身近にあるさまざまな争いごとは、きっと多くが解決に向かうのではないのでしょうか。

これは、「そんなことは苦手なので」とか「嫌なこった」と言って済ませてはいけません。ぜひ、少しの想像力と勇気から、あなたの第一歩を踏み出してみてください。

映画のシーン

恵 「人の気持ちを想像したり、お互いの思いを伝え合ったりすることって大事なことでしょ？ 難しいけどね」

ひかり 「私、それが苦手で…」

リンクに石をぶつけて喜ぶウリ坊とリスくんに、モンチャ 「……もう、やめて…」

リスくん 「だって、あいつ、悪いやつだろ。なあウサねーちゃん」

ウサねーちゃん 「う、うん」

モンチャ 「あの鳥、私たちと話したがっていたわ」

リスくん 「言葉だつて通じなかったじゃないか」

モンチャ 「ちゃんと話を聞いてあげれば…」

ウリ坊 「あんなヘンなやつと話すなんてイヤなことだ」

